

不平を言わない

人の欲望とは際限のないものであり、これに駆られると不平・不満は胸中を去ることがなくなる。このため愚痴を言ったり、人を恨んだり、自暴自棄になったりする。渋沢栄一は、「不平というものは、その人を愚痴、怨恨、自暴に導く恐れがある。世の中の事は、すべて我が意のままにならぬ習いであるから、ある程度までは不平を堪えて分に安んじなくてはならない」（『渋沢栄一訓言集』 p 219）と述べている。

不平を言う人は、その原因を自分以外に求めることを常とする。自分のことは棚に上げ、悪いのは周囲である、他の誰それであると陰口を叩く。このような人は度胸のない者、自分に自信のない者であって、自分を認めてくれ、然るべく処遇してくれと乞い^{すが}続けているに過ぎないのである。周囲を貶めることで自分を相対的によく見せようとしているに過ぎず、人間として未熟と言わざるを得ない。

不平や苦情は聞き苦しく、聞く側の心を乱して不快にする。不平や苦情を申し立てる人は人間的に問題がある人と見^{みな}做され、信用を失うことになり易い。したがって、不平を言う前にどれだけの努力をしたかをまず自分に問うことが大事である。また、自分が認めてもらいたければ、周囲にいる他人を積極的に評価し、その長所を見出す努力が先決である。自分から先に相手を認めて情愛を放射すれば、相手もまたそれに応じてくれるものである。

ところで、不満を持つことは疑問を持つことと一見似ているが、内実は大きく異なる。疑問を抱くことは、「では、どうしたらいいのか」と考えることに繋^{つな}がるが、不満は感情の露出でしかない。進歩や改善につながる疑問は大いに持つべきであるが、不満は周囲を不快にするのみであるから、自ら不満を解消するように努めることが求められる。